困難は、人をつなげると信じて

園長　　野中　泉

「いつ、どこで、誰がなってもおかしくない」。そう思い続けて、準備や学習を重ねてきた２年間でしたが、いざ、自分の園の休園が現実になると、やはり冷静でいることはとても難しいことでした。

慌ててしまったということではなく、現実に、知っている子たちがコロナに罹って高熱などで苦しかったことや、休園でたくさんのお父さんやお母さんが仕事にいけなくなったこと。濃厚接触者になってしまった職員も子どももとっても長い間家から出られず、保育園に来ることもできなかったことなどを目の当たりにしてみたら、それは、私の想像よりもずっと、ずっと重く、辛いことでした。

加えて、何よりも、陽性の連絡をくれた人が皆一様に「迷惑かけて、ごめんなさい、申し訳ない」と謝ってくれたことにも、すごく違和感と切なさがありました。病気になった人が謝らないといけない、こんな変なことが当たり前になっている社会のあり様に改めて疑問がふつふつと湧き上がります。

国や自治体の文書や啓発のポスター等には、「コロナに関する個人情報の取り扱い注意。コロナの罹患者への差別や誹謗中傷をしないように」という意味の一文が必ずはいっています。ということは、現実に誹謗中傷をする人がいるということなのでしょう。でも、賛否両論あることは覚悟の上で、少し乱暴に私見を述べさせてもらえば、個人情報の取り扱いに、異常なほどにピリピリしすぎることや、隠そうとすればするほど、隠された人たちは、自分が「コロナになった、いけない存在」だと思ってしまうのではないか？という素朴な疑問が抑えられません。

同じ職場の仲間が罹患したと聞いたら、お見舞いにおかずでも届けてやりたいと思う。クラスの〇〇ちゃんがコロナになったと知ったなら、「大丈夫？」と声をかけたかったお母さん仲間もいたんじゃないかしら？濃厚接触者だけど陰性がわかったら、親同士力をあわせて、長い待機期間中を順番に子守りをして乗り切ろうよと助け合えたのかも…。

そんなことを、ずーっと考え続けています。

休園が決まってから今日まで、アトムの保護者のみんなは、ほんとうに優しくてあったかでした。「迷惑かけて、ごめんね」と頭を下げる私たちに、「2 年間、ずっとがんばってくれてただけで、感謝やで。謝らないで」「アトムに、いっぱい支えてもらってきたんだから、こんなときくらい頑張るよ」「職員さんたちこそ、大丈夫？うちらが手伝えることある？」と逆に励まされる言葉ばかりで、何度も胸がいっぱいになりました。

コロナの大流行は、それ以前の私たちの社会が、どんな社会であったのか。私たちの関係性がどんなものであったのかを、良いことも悪いことも、浮き彫りにした、そう思えてなりません。

コロナと闘い続けているこの２年間の中でも一番の危機ともいえる大流行の波にさらされながら、保育園の毎日は、私たち職員だけで守っているのではないと、しみじみ実感しています。

こんなときだからこそ、力をあわせて、この波を乗り越えられる私たちでありますように。